

NPOの力強さと自分の成長

社会福祉学部 社会福祉学科 2年 加藤美咲

活動先：NPO法人だいこんの花

担当教員：岡久美子

1. 自分の成長と気づき

私はサービスマーケティングの活動を行うまで、自分を過信している傾向にあった。悩んだり困ったりしたことがあっても、取り繕ってその場限りでやり過ごしてきて何とかかなと思っていて。しかしそんな考えが通じるのは学校の中だけで、社会では通用しないということに気づかされた。

サービスマーケティングの活動先では常に自分の考えを持ち、行動することを求められていた。今まで先生の言うことだけを聞いてきた私は自分の考えもまとまらず、何を言っているのか分からなかった。またそれは活動先の方に対してのほかにチーム内でも起きていた。チーム内でも連絡を取り合わなかったり、意見を交わさなかったためすれ違いが起きたりチームの状況を把握することができなかった。結果活動先の方にご迷惑をかけて叱られてしまい、自分たちの信用を落とすこととなってしまった。

これをきっかけとしてチームのメンバーの意識が変わり、いないメンバーを補うように自分たちが出来ることを少しでも見つけ積極的に行動するようになった。また徐々に自分の考えを持てるようになり、施設の方からも任せられる事柄が増えたように感じた。

活動先の方からは最後まで私たちに厳しく意見してくださり、NPOを運営していく大変さや社会の厳しさを身を以て伝えてくださった。また学校の外で実際に活動を行うNPO法人でサービスマーケティングを行うことで、いかに自分が怠惰的に物事に取り組んでいたか気づいた。例えば、普段の振り返りシートでも反省や次の目標を書き込んだとしても、次の週には忘れてしまい再び見直すこともなかった。何気ない一つひとつの学習活動には全て意味があり、その意味を理解し実行する事がいかに大切か学んだ。

NPO法人の方々には熱意と行動力で事業を運営しているため、それに参加させてもらおうとしている私たちはボランティアだとしても、それ相応の覚悟をもって活動に臨まなければならないと思った。

2. 活動を通して気づいた地域や市民活動の現状や課題

活動を通し、NPOの事業の運営には地域住民の理解や協力が必要不可欠であることを知った。私が活動させていただいた施設では頻りに地域の方々を交えてイベントを行なっている。地域の方々と交流をすることでスタッフに限らず利用者也交流することができ、そのイベントが利用者の楽しみの一つとなったり、地域の方々もどんな活動を行なっているか知ることができる。またインターネットでサイトやSNSを活用することで現状を伝えることも行なっていた。

私の活動した周辺の地域は人口は多い方であったが、もっと少ない地域ならばその施設は孤立してしまうだろう。地域住民の存在は事業について理解してもらっただけではなく、事業によってはボランティアを募ったり協力を仰いだりすることも可能になる。このことから地域住民と協力して運営していくことで運営維持につながると考える

またNPOの課題としてあげられるのが資金難だろう。活動先の方も賃金は決して良くないが、事業に対する想いに変えられないとおっしゃっていた。スタッフの想いの他に地域住民のニーズや期待もスタッフを支える力の一つになっていることも知った。

重症心身障害者の方と買い物や花火大会に行った際には、一般の方と施設の関係者との違いに気付いた。関係者である私たちは、少しの段差や通路の狭さが気になったり人混みでぶつかったりしないかをととても気にしていた。しかし、ただ買い物に来ている一般の方は段差を気にしたり、こちらに気を遣うことはあまりなかったようにみられた。ここが意識の差であることに気が付いた。恐らく一度関係者であることを経験した私は一般の側にまわったときに同じような障害を持つ方を見かけたら、気を付けたり気に掛けたりするだろう。しかしもし私がここで経験することがなければ気遣うことはできなかったかもしれない。自分とは違う立場の人の気持ちや感覚は経験しないと分かりづらいものだ。だからといってそのような障害やハンデを持つ人を理解しなくて良いというわけではない。私たち関係者が理解を広めようと活動を行ったり、自ら理解しようと行動しなければならないと私は考える。風潮や偏見で人を判断するのではなく、自ら学びその上で自分の考えを持つことが重要だと考える。一人でも多くの人に理解してもらうためにも、一人一人がそのことを知っていなければならないと考える。

サービ斯拉ーニングを通じてみえた理解の壁

社会福祉学部 社会福祉学科 2年 鎌谷 歩

活動先：特定非営利活動法人だいこんの花

担当教員：岡久美子

1. はじめに

2016年8月、サービ斯拉ーニングとして6日間「特定非営利活動法人だいこんの花」で活動を行った。そこで様々な介護度の利用者、職員の方々と出会いによってみえてきたもの、重度障害者や地域の人々と接することで感じたことを一言でまとめると、「理解してもらうことは簡単なようで難しい」である。自分たちが何をしたいか、また、それらを人に伝えるためにどう言葉と順序を組み立てればよいのかを考える機会になった。

2. 利用者の理解

だいこんの花の施設である、「すずしろの花」でお世話になった時に、レクリエーションを何個か考えてほしいと頼まれた。全体で4つ、体を動かすレクリエーション、頭の体操のレクリエーションで利用者さんに楽しんでもらえるもの考えた。体を動かすレクリエーションでは、立つことができる方も、車椅子ができる方でも楽しんでもらえるようなゲーム新聞紙相撲を行った。先に破れた方が負けという単純なルールで実際に行ってみると利用者も職員の方も名勝負を繰り広げて盛り上がり、たくさんの笑顔が見れたので楽しい時間を共有できた。中には職員さんでも驚くような一面を見せてくれた利用者さんもいた。しかし、その次にしようと思ったひらがなビンゴでは、ビンゴのルール自体わからない方がほとんどで職員と一緒に一人一人説明にあたった。何度説明しても「わからないからあなたがやって」と言われ、正直戸惑った。このときに「理解してもらうことの難しさ」に気づいた。

どう伝えれば利用者が傷つかず、なおかつ理解してもらうにはどうすればよかったのか。わからなくてもよいから実際にやってみる。という方法をとってみた。口だけで説明せず、自分たちも鉛筆を持ちここに利用者が思いついたひらがなを書いていく。30分のレクリエーションの中で説明の時間は半分以上とったが、最後にやっと理解してくれた方もいらっしやったので安堵した。

3. 社会への理解

「高齢者施設などの福祉施設に一番目をそむけているのは主婦達である。」この言葉は、活動最終日にだいこんの花の代表がいつてくださった。ほとんどの主婦に子どもがいて、子どもはわからないことがあれば大体は母である主婦に聞くだらう。福祉施設に働いている両親がいる場合は、福祉現場が理解できても、サラリーマン家庭ならどうだろうか。福祉施設の近辺に住んでいる方達はどのようなところでどんなひとが住んでいるかわかってないだらう。核家族化が進み、高齢者は3世帯で暮らしている人が少なくなった。その環境の中でその核家族にとっての高齢者のイメージが悪い方向へ進んでいき、今や親と離れて暮らすか介護施設に入れるかなどの方が日本社会で主流になりつつある。そして、介護などの福祉について間違った知識を主婦達は子ども達に教えるか、見せないようにしてい

るのではないかと私は考察する。

それらは障害者にも言えることである。5日目に重度障害者施設の方々と大型ショッピングモールと花火大会へ付き添いで行かせていただいた時に、ただ車椅子を押して買い物をしていただけなのに、振り返って見てくる人や、偏見的な目で見てくる人が多く見られた。気になるのはわかるが障害を持っているだけであってただの普通の一人の人間なのは違いない。

では、そんな主婦達に知ってもらうために地域の中に入って何をするのか。だいこんの花では、「だいこんまつり」というイベントを行い、子どもから大人まで楽しめる物作りだけではなく、バザーを開いて日用品をスーパーよりも格安で提供する。「普段から訪れることのないところに気軽に来てもらえるようこちらからも機会をもうけることも大切。」と代表もおっしゃっていた。ほかにバザー以外でも地域のお店などが屋台を出して限定品などを作ってその場で売るなど、機会を作って地域との連携や縁ができればちょっとしたイベントでも大きくできるのではないかと私は考える。地域の中で一緒に共存するための中心として福祉施設は成り立ってもよいと私は考察する。

福祉への理解

社会福祉学部 社会福祉学科 2年 熊澤 早希子

活動先名：特定非営利活動法人だいこんの花

担当教員名：岡 久美子

① 自分の成長と気づきについて

私は特定非営利活動法人だいこんの花でのサービ斯拉ーニングを終えて、企画やレクリエーションを行うことは簡単ではないのだと気づいた。

学生企画ではオリジナルうちわ作りを行った。それまでの準備で、報告・連絡・相談の大切さについて知った。サービ斯拉ーニングの活動中に報告・連絡・相談をあまりしなかった。その結果、企画の準備をなかなか進めることができず、ぎりぎりまでやっていた。こまめにメンバーと連絡を取っていたら準備をスムーズに進めることができたと思う。学生企画を進めていく中で、参加者が短時間で簡単に作るにはどのように工夫したらよいかなど気軽にできるような、参加者側のことも考えて企画を準備する必要があるのだと企画を通して学んだ。このことから報告・連絡・相談の大切さ、企画を行うことの難しさなどを知った。

レクリエーションでは、自分たちで考えたレクリエーションを利用者の方と一緒に行った。その時に、利用者の方がけがをしそうになった。私は、誰もが参加できる簡単なものにしようと考えたが、危険性についてあまり深く考えていなかった。どんな危険の可能性も予測して、どのようにしたら最小限の危険ですむかを考え、何度もイメージをする。そうすることで利用者の方は安心してレクリエーションを楽しむことができる。このことから、リスクマネジメントの大切さを知った。

私は、認知症について授業で、同じ内容の会話を何度もすると聞いた。頭では理解していたが、実際に体験してみて、何度も同じ会話をすることはこういうことなのだ改めて実感した。利用者の方と話をしている、同じ会話をしていると気づき、少し内容を変えてみたが、最後には同じ会話になっていた。会話の内容を一部変えただけでは、また同じ会話になってしまう。同じ会話をしないためには内容全体を変えなければいけないのだと知った。

② 活動を通して見えてきた地域や市民活動の現状や課題について

サービ斯拉ーニングでは、高齢者だけでなく障害を持つ方ともコミュニケーションをとった。活動では、障害を持つ方と一緒に買い物や、花火大会に参加した。そこで、障害を持つ方の目線で私たちの生活する場所を見ることができた。私たちはエレベーターがなくてもエスカレーターや階段がある。しかし、車いすの方はエレベーターがないと階を変えることができない。さらに、障害を持つ方は周りに気を付けながら買い物をしていたが、一般のお客さんはあまり周りを気にせず買い物をしていた。なので、周りに気を付けながら買い物をしている、一般のお客さんとぶつかりそうになった。私たちの街は障害を持つ方にとってこんなにも生活しにくいのだと気づいた。

サービ斯拉ーニングを通して、高齢者や障害を持つ方への理解が足りないのだと感じた。

理解が足りないから高齢者や障害を持つ方に対して気かけず、地域で生活しにくいと感じてしまう。理解が足りれば高齢者や障害を持つ方に対して気配りや気遣いでき、誰もが生活しやすい地域になる。活動先のだいこんの花では、地域の方に福祉施設のことを知ってもらおうと、だいこんの花の施設で地域住民参加型のイベントを開催している。このことから、地域が福祉に関してもっと理解する必要があると思う。そのためには、福祉関係者の方からのみ歩み寄るのではなく、地域の方からも歩み寄る必要がある。例えば、だいこんの花のように施設で地域住民参加型のイベントを開催する、地域の方はイベントに積極的に参加する。そうしなければ、福祉に関して理解が進まないと思う。理解が深まれば、地域での生活が送りがやすく、その人らしい生活ができると思う。

地域でその人らしい生活を送るには地域の社会資源の活用が重要になる。社会資源を活用するにはソーシャルワーカーだけでなく利用する側も自分の地域の社会資源について知っておくと、より、その人らしい生活を送ることができる。

よって、地域の方に福祉に関してもっと知って、理解してもらうことが地域でその人らしい生活を送ることができると思う。